



センター長退任にあたって

瀧上, 凱令

(Citation)

大學教育研究, 07

(Issue Date)

1999-03

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004636>



センター長退任にあたって

瀧上凱令（国際文化学部教授）

本年 2月15日をもちまして大学教育研究センター長の任期が満了し退任いたしました。今後は国際文化学部の一教員として「非言語コミュニケーション」の研究と教育に専念するつもりであります。

私が大学教育の問題、とくに教養部改革、一般教育等の改革に本格的にかかわりましたのは、平成元年に当時神戸大学の教養部改革を担当しておりました「新学部設立推進委員会」の委員長になったときからです。今年でちょうど10年になります。平成 4年10月に大学教育研究センターが設置されてからは、副センター長を 2期 4年プラス 3期目4ヵ月半と、センター長を 1期 2年務めさせていただきました。この間、学内・学外のたくさんの方々からご指導・ご援助をいただきました。本当にありがとうございました。

新学部設立推進委員会のときには、文部省の「大学改革等調査経費」の配分を受けておりましたので、喜多村和之先生、麻生誠先生、井門富二夫先生、関正夫先生はじめ、たくさんの方々に講演に来ていただきました。また、東北大学や名古屋大学など多くの大学を訪問させていただき、ご指導をいただきました。大学教育研究センター設置後は学内外のさらに多くの方々からご援助をいただきました。大学教育研究センターでは毎年「研究集会」を開催し、平成10年12月までに 6回を重ねましたが、その基調講演には、新野幸次郎先生、大崎仁先生、天野郁夫先生、梶田叡一先生、潮木守一先生、市川昭午先生においでいただきました。研究集会ではこの他たくさんの方々に講演や報告をしていただきました。また、年に数回開いております研究会にもたくさんの方々においでいただきました。お陰で全国の高等教育研究の専門家や大学改革の実務を担当される方々から直接ご指導を受けることができ、心から感謝致しております。

またこの10年の間に、大学について、大学教育について、大学教員について、大学生について、さまざまなことを学ばせていただくとともに考えさせていただきました。しかしながら、分からないことがたくさん残りました。

そのうちの一つは教養部を廃止したのは本当に良かったのかということです。教養部は大学の内外から「何の役にも立っていない」と言われながらも、実は大きな役割を果たしていたのではないかという思いがあります。むしろ問題は教養部と学部との相互理解と協力関係の欠如だったのではないかと思います。その意味では教養部の廃止はやむをえない結論だったと言えるでしょうし、それによって教養部と学部の対立関係は解消されました。しかしながら、従来的一般教育と専門教育とを継ぎ足しただけの教育に終始するならば、教養部があったほうが学生にも教員にも良かったのかもしれないという思いがなお残ります。つまり、今求められているのは、教養教育と専門教育の両者を融合した本当の意味での四年一貫カリキュラムとそれを実施するためのより良い体制だと思われます。しかし、それがどんなものかということとはよく分かりません。

もう一つは、上記のことにも関連しますが、大学は一体何を教育するところなのかということです。いま世間が大学に求めているのはすぐ役に立つ知識を学生にたたき込むということのようです。たとえば、英語が話せる、情報機器が使える、専攻分野の知識があるといったことです。つまり、潮木守一先生が『キャンパスの生態誌』の中で「自動車学校型」と名付けておられたタイプの教育です。大学教育がこれだけで良いのなら、教育の目標もはっきりしますし、それに応じたカリキュラムも作りやすく、教育効果についての評価もやりやすくなります。しかし、大学教育はこれだけで良いのでしょうか。むしろ今求められているのは問題を発見し、問題を解決する能力ではないのでしょうか。もちろん問題を発見し解決するためには知識が必要ですが、それだけでは不十分だということも明らかです。では一体どういう教育をすれば良いのでしょうか。またもし有効と思える教育が開発され

たとしてもその効果をどのように測ればよいのでしょうか。

私自身は今後は、国立大学の一教員として及び個人的な興味範囲でこういう問題を考えていくことになりましたが、よろしくご指導の程お願い致します。